（明治三十二年三月二十二日第三種郵便物認可）　昭和十一年八月十五日　磐城新聞　【土曜日】　第四千七百二號　【一】

夕刊
磐城新聞
八月十四日發行
發行所 磐城新聞合資會社
（日曜祭日翌日休刊）

擔がれた話

平＝大津間道中コント　酒井孤村

十七

爲一廣瀨は今頃あの女に…虫の知らせか宙を飛んで碧水館へ來て樣子を窺ふと果して僕と女が對酌中なのです、是は容易な事では無いと考へた樫村は幸ひ嚴父の親友で面識ある署長が居るので直ぐ訪問して夜來の一件を訴へた、署長の話では其の女は頗る變態性で年少の學生で彼の毒牙に掛つた者は數知れぬと言ふ、樫村の注進に大喜びの署長は直に捕縛の手配をなし時刻ヶ推し測つて踏み込んだので僕と同座してゐる事も最初から判つての仕事でした

午前八時、女は留置所から引き出されました、蒼白の顏色に稍充血した眺其れでも兇性を臘殺する丈の魅力は充分に備つてゐるのです、刑事四人、署長、犯人僕等二人の一行は關本驛に向ひました。斯ういふ際どい場合にあり乍ら、女は意味を含んだ秋波を僕に送るのです。大膽を越した强か者です。平署へ到着して小憩後直に訊問が開始せられました、僕と樫村は更めて經緯を委細に聽取されました。書記が一言一句も洩らさじと書き取つてゐます。

餘り可い氣持はしません。續いて女の訊問に入りましたが何を考へたか女は堅く唇を嚙んで一言も答へません、携帯品の檢査が始まりました、女の持つ手箱樣のものに警官が手を掛けると女の顏は土色になり、身を顫はして飛び掛らん計りの形相です。風呂敷が解かれて現はれたのは二個の柳行李です。警官は容捨なく蓋を取りました、油紙で幾重にも包んだものでした、其れが開かれるや、プーンと異臭が鼻を衝いて男の生首が現はれました。鮮血淋漓鬼氣迫るやうです。警官は首の口を開けば齒がありませんでした。だが是には一場の話があつたのです。皆さんお退屈樣、廣瀨はさつ〳〵と涼み臺から家に入りました。聚樂館のハネ太皷が流れてゐました

（終）

平吟抄（四）

島田忠夫

○北目町、北斗莊に沙羅双樹を見て

○みほとけが涅槃に入りし沙羅の木の若木しげるをここに見るかも

○葉のかげにこもる蕾の青き玉星の如しとあるじ言ふはや

○朝咲きて夕べには散る沙羅の花かがやくばかり咲くはよろしも

○北斗莊にあるじ訪へれば沙羅の木の下に句作り餘念なし君は

○白々と泰山木のかがやきて咲けるかたへに沙羅みどりなす

七夕俳句大會

日時、八月廿三日午後二時より
會場、平町城山聚樂園
會費、二十五錢
課題、『天の川』三句
主催　青蔭發行所
後援　磐城新聞社

高野鑛泉行

青蔭同人

二

『時鳥が啼くぞ』と一行中の誰かがさけぶ、まさしくそれである、しかし只の一聲か二聲丈であつた

山の脊を越えると湯の灯が遠く指さくれるのであつたこのあたり一帶に松林である、やがて密林ともなればこの間道を湯へ下ることはなか〳〵容易でないと思つた。筆者などには全く始めての道なのでどこをどう通つて來たのか想像がつかぬ、ただみちびかるゝ儘に闇の中をひたおしに下つたのであつた。鑛泉宿についたのは九時頃であつたがもうすでに戸を閉してゐたので雨戸を叩いて起てもらつた。暗夜の事とて庭園の風光を鑑賞するよしもなかつたが、廊下を渡つて行くと白藤の花が地上にこぼれてほのじろく見えたのであつた

一風呂あびて渾身の汗を洗ひながし、すつかりくつろいで座につく、たのしい夕げの膳がはこばれる、あまり突然なので何の用意もなかつたと云つて宿のものが詫びる、それでも山の味はまた格別であるし山に入つては山のもの、海に出ては海のものが好いので、山の湯宿に來て海のものを望むはむしろおろかしいことだ、作句するには時間がおそいしそれに筆者などは大分つかれてしまつた、誰かに欲つた題が課されてあつたやうだがつい一句もものにならず寢床に入つてしまつた。元氣な連中が何やかやおしやべりをしてゐたやうであつたが、筆者はすつかりねこんでしまつて其の後のことについては書きしるすすべもない。

（何鳴）

ポッカリ眼があく、情熱の濃い話が織りなされた昨夜は、たれもの情をなやまして、安らかなねむりをなさなかつたらしい

夜市

平田一郎

暗い通り　玉蜀黍燒いてる匂ひ

あの角の　お婆さんだよ　夜市に行く道　いつもある店

蛾のまるく飛ぶ　薄暗い明り

トマト赤く　キャベツ蒼白く濡れて

若い百姓　手拭で額ふいてる

暑いのに　ドラ燒屋もゐる

女の人　餡を入れる手つき

竹のへら　機械みたいに動くよ

ゆかた着て　人と人子供つれて

順番に　づつて行くよだ

籠さげて　何にかしら買つて行く皆な

観野馬追祭

珠雲　小野鶴平

雲雀原頭意氣雄
三千歩騎簇西東
淸看馳驅鐵衣士
較上猶思一戰功

8月15日

△賴朝鶴ヶ岡八幡宮に西行を招き歌道を聞く（文治二）△奈翁生る（一、七六九）△蝦夷を北海道と稱す（明治二）△ヒツトラー獨墺國境に襲はる（昭和八）

小説　高橋是清（92）

松浦泉三郎作
佐々木今朝吉畫

唐津行（二）

小花の和喜次を推薦したい仕事と言ふのは、肥前唐津藩が新らしく開設する英語學校の教師のそれだつた英學教師の他に、佛蘭西式歩兵をつくるために探してゐた。調練と喇叭の教師は既に決定したが、英語教師だけがまだ決定を見ない、渡邊內務次官から推薦方を賴まれて、小花の推した林東三郎（後の林董）は、目下アメリカ公使館の書記をして居り、肥前落ちは御免だ

と拒絶して來た。唐津藩家老友常典膳は、頻りにその決定をふいでゐる。眞に困つてゐるところだ、と、小花が言ふのである

月々の手當は向ふ賄で百圓出す筈だが、どうだ、行く氣はあるか——あらばと決意を促した

これは自分の憂悶の生活に光明を導く唯一の道らしい、と、和喜次は思つた

即座に承知の旨を答へた。小花は喜んだ。話はとんとん拍子に進んだ。友常典膳とも會見し、間もなく正式決定の運びにまでなつた。典膳は、出來るだけ早く出發して貰ひたい。然し學校の校舍も、從つて舍宅もまだ出來てゐないので、當分は間借りをしてゐる心算で、單身出向いて欲しいと言ふ條件を出した

和喜次はこれを承諾し、交換條件として、手當の前借を申出た。無論否やはなかつた。和喜次はその前借金で各所の借財を整理したり身廻りの物を備へたりした唯本多等のために牧田萬象から借りた二百五十兩の返濟は出來兼ねたので、これは證書を書直し今後毎月唐津藩から受取る手當金の中から仕拂ふと言ふ事で話が付いた

かくて赴任の準備は殆ど出來たが、唯一つ、氣になるのは、祖母喜代子の身體だつた。養父覺治養母文子、共に今は亡く、祖母は家婢一人を對手に、老齢の身を淋しく暮らしてゐた。それだけにせめて祖母だけは…と思つたが無論望み得なかつた

桝吉は——さうした話を聞かされてはゐなかつたの『で妾だけは御一緒に…』行けるであらう事を、確信してゐたらしい口吻で訊いた。で、和喜次の口から

『實はそれが出來ぬ事になつたのだ。わし一人だけにと言ふ先きの註文なのだ。是非もない』

と、聞くと、驚いて淚ぐんで男の顏を見上げた

『わしも是非にと思つてはゐたのだが……』

と、和喜次は勞るやうに桝吉を見て

『致し方がない。その替り賴みがある』

『賴み？』

『うん、祖母を賴みたいのだが！』

『祖母さまを？』

『さうだ。淺草の牧田の好意で、牧田の裏手にある家を、そのために借りる約束もしてある。是非わしのゐぬ間の面倒を見て貰ひたいのだが……駄目かな？』

桝吉は決心したやうに顏を擧げて、きつぱり言つた

『御一緒に行く事は諦めませう。さうして祖母さまは確かにおあづかりします。安心して行つて下さい。東京に心遺ひの要らぬやうに妾は藝者稼業から足を洗ひませう。祖母さまの事は……』

『濟まぬ！』

『そんな……』

と、桝吉は優しく睨んで

『お前の祖母さまなら、妾のためにも祖母さまでは……』

『判つた！』

和喜次は桝吉の手を執つた

『これでわしも安心して行ける。故あつて名を變へるが、その名は東家に因んで東太郎。浮氣をするときかぬぞ』

微笑してぐいと引き寄せた

ます吉も晴れ〴〵と笑つた

外科一般　內臓外科
レントゲン科
北川外科
平町新川町（諸橋醫院跡）
醫學博士　北川芳夫
小林良次
電話四六四番
（血液檢査每日）
イツデモ入院デキマス。

◎◎◎◎◎◎◎
七夕祭飾附材料
飾玉提灯。大小判色紙。吹流用ワク大・中・小。虫玉。テープ各種。ラツキーモール久壽玉（四寸ヨリ二尺マデ）パラピン製折紙。久壽玉用カゴ（尺ヨリ三尺マデ）
其他御注文ニ應ジ如何樣ノ形ニテモ出來マス。
平町一丁目
教育玩具雜貨問屋
森下商店
商號　豆屋

電話番號變更
產科婦人科
五十嵐醫院
平町新川町一二
醫學博士　五十嵐雄二
電話三六九番
（入院應需）

メガネは正確にして廉價
最新式各國製レンズ
豊富に取揃へて御座います
眼鏡
（亂視用眼鏡即時調製）
根本時計店
平町二丁目　電話六〇七

氷水
冷いおいしい夏の飲物各種
アイスクリーム
アツキアイス
ミルクセーキ
ソーダ水
みつ豆
其他各種
出前迅速
御散歩には是非御出下さい。
平町一丁目
藤寅
電話一四一番

◎◎◎◎◎◎
七夕祭飾附品
七夕祭材料紙格安勉强致します
五色染紙　金銀紙　色セロファン紙
色テープ　色艶紙　色パラピン紙
久壽玉用　色ライス紙・櫻紙
和洋紙
文具
坂本紙店
平町一丁目　電話一八番
パイロット萬年筆
セーラー萬年筆
特約店

お醬油は……ヤマフル
味噌醬油
たひら正宗
鰹節 食料品
醤屋
山崎合名會社
福島縣平町
電話（營業部一〇番・本店二七番）
明治生命磐城代理店　山崎與三郎

產科
婦人科
外科
藥局
院長　木村寅次郎
醫學博士　內木宗八
藥劑師　大岩俊雄
入院隔離病室完備
木村病院
平町新川町十九番地
電話一六四番

御禮
生ビール發賣以來連夜豫定の樽數を賣盡し有難う存じます。
就ては御禮として毎土曜日を黑ビールデーとして御奉仕いたします。
平會館
電六二四

新盆の戒名入提灯
例年の通り御安く御注文に應じます。
弊店の提灯が……體裁が良くて値段の最も安い事は自分で一切の製造仕上げをする事と場所が不便の爲で有ります。
平町才槌小路
金子提灯店

御知らせ
防虫劑
玉ナフタリン
左手一杯ツカミ取進上
開業三十週年記念謝恩デー大好評を博しましたにつき引續き毎月十五日を謝恩デーと定め御買上金五十錢以上の御客樣に『玉ナフタリン』を差上ます。
アセモ、タダレに妙藥トフメルを無料でつけて上げます。
藥と衛生相談所
平町古鍛冶町縣社下
阿康藥局
電話四四番
振替口座東京[illegible]

藥品
百貨
福島縣平町二丁目
藥劑士　鈴木庄助
西村屋藥舖
電話三番
振替　東京六二〇[illegible]　仙臺一二九九

夏繭も高いぞ、五圓台

來月初旬から掃立の初秋蠶に

平蠶業取締所 無謀養蠶家を警戒

主として三阪、澤渡方面の山間部で行つてゐる郡下の夏繭は愈々兩三日前から出廻りドシ／＼磐城片倉其他の特約方面に向けられて居るが、相場は春繭高値の餘波を受けて貫當り五圓台の高値を呼んで養蠶家を喜ばして居るが出廻り高は大体四千五六百貫と見られて居る

夏繭が過ぎると來月初旬頃から弗々初秋蠶の掃立が開始されるが、蠶業取締平支所最近の調査によるその掃立量は六萬九千貫程度、春繭から夏繭と相當の高値を示して居るので一攫千金を夢見る養蠶家のうちには無謀な掃立増加によつて取り返しつかぬ違蠶を招く場合あるべきを懸念し同所では今から自給自足、堅實主義の普及に努めて居ると

海軍志願徴募年齡變更

改正勅令公布さる

海軍志願兵の徴募は採用の年の十二月一日において年齡十五年以上二十一年未滿のものにつき行はれ各兵種別年齡については志願兵令中にそれ／＼定められてゐるが、今回これを改正して右年齡の範圍内において海軍大臣が定めることになりこれに伴ふ海軍志願兵令改正が十二日勅令を以て公布され、同時に施行規則の一部が改正し左の如く各兵種別年齡が發表された

一、水兵（掌電信兵志願兵を除く）航空兵（豫科及び偵察練習兵を除く）機關兵、看護兵及び主計兵十七年以上二十一年未滿

二、掌電信兵たるべく志願する航空兵十五年以上十九年未滿

三、豫科練習兵たることを志願する航空兵十五年以上十八年未滿

四、軍樂兵十六年以上二十年未滿

愛と理解で明るく伸ばせ

平自營會募集の刑餘者保護標語發表

平自營會が來月十三日の司法保護デーに際し募集した刑餘者保護の宣傳標語は既報の如く應募三百五十一點に上り十一日同會事務所に關係者の審査會を開き入選を左の如く決定した

△一等『愛と理解で明く伸ばせ』河沼郡野澤町伊藤榮照

△二等『理解に勝る教化なし』草野村御城柳井方飯島弘

△三等『救へ刑餘者非常時日本』會津東山溫泉山崎モヨ『愛護は更生の母』平町三丁目五四三森直

△佳作『勞はりませう釋放者』岩瀨郡鏡石村關根秀雄『救へ刑餘者我子の樣に』會津東山溫泉山崎とよ子『招け導け憎くむな愛せ』平町古鍛冶町七金子千代吉『愛の手のべます更生せ』同金子さと『笑つて迎へ情で導け』同紺屋町二九吉田政之『救へ愛せよ刑餘の人を』同町六間門一六鈴木雅光『愛で導き希望で生かせ』同揺槌小路二六鈴木仁『改心する人我等の仲間』福島市戸ノ内鈴木惣市

古川狄風伯滿蒙遊歷談

あす自營會評議員會で

昨報—明十五日午前十時から平警察署會議室で開く平自營會評議員會には別項縣賞標語の入選發表賞品授與等の外古川狄風氏の滿蒙遊歷談あると、なほ當日の出席は約八十名、福島地方裁判所檢事局檢事正增田晴彥氏臨席の豫定

古川氏は本縣須賀川町の出身、滿蒙美術調査會美術部長で朝鮮、滿洲、蒙古、喇嘛廟等に十八年の足跡を印した實踏實寫の日本畫家である

縣獵友會植田支部 クレー射撃大會

明後十六日佐糠海岸で

縣獵友會植田支部主催の納涼クレー射撃會は明後十六日午前八時より植田町字佐糠海岸に於て開催するが目下濱通り各支部より多數申込もあり盛會を豫想されて居る、尚ほ會費は晝食附二圓、射替料一圓で一等自轉車一臺以下十等迄賞品を贈ると

植田附近國道測量完了

勿來—久の濱間國道改修工事の前提とも見るべき鮫川橋の架替工事の測量は内務省間利田技手外東北大學工學部生九名の一行により去月十六日來連日行はれてゐたが一昨十二日終了、一行は更に國道改修測量のため昨十三日湯本町に本據を移した、尚は植田方部の測量は元植田署前を起點として鮫川橋を通じ錦村役場附近迄の區間であつた

郡下中堅青年講習

各町村粒選りの百餘名 愈よあす矢吹ケ原へ

郡聯合青年團の郡下中堅青年講習會は既報の如く明後十六日より四日間西白河郡矢吹ケ原縣立修練農場で開かれ郡下各青年團の中堅人物百名は黒田縣社會教育主事補、農場職員の外遠藤好間尋常、黑木磐崎第二、鈴木勿來第二各校長指導の下に四日間規則ある修養訓練を受け傍ら近在模範青年團を視察するが、明十五日午前八時半磐中校庭集合、小檜山團長、西山、大嶺兩副團長等引率、自動車數台に分乘同十時出發すると

。。。。。。三小學中間召集 夏休中の平町三小學校には明十五日午前七時半全校生を召集

六七丁目青年役員改選

平町六、七丁目青年分團總會は昨十三日開き役員を左の如く改選

團長荒井常信 副團長白土武雄 書記橘光二 會計宇田川半次 副會計佐々木源作 評議員久野誠助 金成正一 鈴木保夫 吉野運之助 金成秋雄 伊藤吉太郎

。。。。防護團則制定 平町聯合防護團では今十四日午後七時から各團の首腦部が町會議事堂に參集團則制定に關し協議する

戰死者の慰靈祭に懸賞假裝盆踊大會

來七夕に鹿島の催し

鹿島村男女青年團では消防組等と聯合主催で來る二十三日の七夕當日午後六時から同村小學校で『無名戰死者無緣佛慰靈祭』を行ひ施餓鬼、慰靈踊等がある更に同夜村内から募集の郷土に即した盆踊歌詞を發表して懸賞假裝の踊り大會を行ひ更生指定村として村民の融和を圖る事となつた

民謠募集 あす締切

植田青年團で今月初旬來募集中の民謠歌は愈々明十五日締切る事となつたが應募數意外に多く廿二三日頃審査を行ふと

鑛の炭—お内儀さん連に 榮養知識普及

磐城と古河で講習會

鑛山生活者の榮養について縣でも特に留意し榮養改善指導につとめてゐる折柄更に鑛夫家族の榮養知識普及啓蒙と體質の向上を圖るため來月一日より古河炭礦と磐城炭礦の二ケ所で各一ケ月間榮養講習會を縣が主催となつて開くことになつた、講師には榮養研究所より榮養士を招く筈で一千戸乃至二千五百戸の鑛山の主婦を講習者とする豫定

歸れよ伜！

重病の父親から 平署に搜索願

西白河郡金山村農綠川良之長男才（四二）は五年前出稼ぎに出たまゝ音信不通に陷つたが、最近父親が重病で頻りに『伜に一目遭ひたい』と云つて居るので搜して欲しいと十三日近親者から平署に搜索方を願ひ出た、尚才はドモリである

海底から盗む

小名の漁夫達檢擧

小名濱中坪馬上正次郎（三四）同町沖見町志賀倉太郎（三三）同三男源藏（二二）の三名は去る一月中三重縣廻船太平丸（船主高山庄次郎）が同港沖合で破損した舵鉋八十貫を沈沒させたのを知り去月廿六日夜協力密かに潜水引揚げ、これを同町古物商渡邊留次郎外二名へ四十二貫（價格八十四圓五十錢）を密賣した事發覺、十三日平署に檢擧された

唐黍の焼き立て

早くも立秋夜景

水銀柱の奔騰に正比例して跳ね上つた氷の値だんは目下一貫目十七錢、立秋から一週間にもならぬのに一向需要が減らぬので氷屋さんホク／＼の態であるが、流石は季節・陽氣リレーのバトンは既に秋へ渡されたかたちで關銃夜の銀行附近には例年見る唐黍賣りが踏つて七輪の火を煽り乍ら頻りに威勢の良い音丈けの機關銃を發射させてゐる

時計屋荒し專門賊

けふ平署に捕はる

十三日午後十一時から今十四日午前二時迄の間に四倉町本町時計商瀨谷友松方に賊侵入合鍵を使つて抽斗に入れて置いたクローム、金時計等十數個並に指輪數個（價格見積百五十餘圓）を竊取されてゐるを朝方に至つて發見、屆け出により各署に手配犯人嚴探中午後一時頃平町一丁目常盤屋時計店方で贓品處分らしき男を平署草野刑事が捕へ取調べると、右は鳥取縣西伯郡車尾村車尾生れ前科一犯原田利衛（二八）で右の外既報去る九日湯本町三函大槻秀雄方の犯行も自白、なほ餘罪ある見込で追究中

紙魚に聽く

何處迄本當か

磐城の妖怪談

享保年中（一七一六—一七三六）戸田村（大野村大字戸田）の農民に孫兵衛と云ふのがあつた。銃術を能くし山獵を好む—とあつて今なら取り敢ずクレー大會の名射手と云つた處、當時に於ける森林主事の樣な職に在つた

一日鬼越山に登つて雉子笛を吹き、良き獲物御座んなれ、と待ち構へた處、フト頭上を仰ぐとそこの笠松の樹上から孫兵衛目覓けて飛びかからんとして居る大蛇ふるの—肝を潰し、我家さして飛んで歸り、取つて置きの今に云ふ實彈を携へ再び出直して現場に赴いた

八幡樣の見世物に出る樣な大蛇は、樹上に鎌首を擡げ目を瞋らして孫兵衛を睨んでゐる。西遊記の孫悟空でオリンピックスタヂアムを唸らせたマラソンの孫君、孫には古來英雄多し、我が孫兵衛君自若として二つ彈を裝塡しヅドンと許り打放したのである

蛇頭部に一蹤を食つた大蛇は筋斗り打つて谷深く墜ち込んだのに孫兵衛勇氣百倍直に馳け降りて獵刀を拔いで蛇の頭を斷ち藤葛で縛つて鼻高々と我家へ引き摺り歸つた、而して庭上に曝す事連日、愈よ乾上つた處で之を家居の一隅に所藏した

其後孫兵衛の孫がその鬼越山から轉げ落ちて非業の最期を遂げたのを始めとして家人も亦疫疾に罹つて連日八日毎に死するもの三人その後火災あり所藏の蛇頭骨灰燼に歸したが爾來尚は災厄頗る多く家産年に墜ち衣食殆ど支へず、人皆蛇の祟りとした

吉田多憩次年六十二、幼時て此話を門馬彥兵衛なるものに聞く、彥兵衛歿する五十年前にあり、歿年九十、死蛇の脊骨を視るに及ぶ、其の大梳の如き片々皆離る、後此の骨を拾集して以て埋むと云ふ

大野村大字戸田の東方字𥡴作の東端、鬼越山、四倉町と界する處に小石祠あり笠松神社と稱す、山腹に蛇塚あり之か即ちそれである—と傳へられてある

平町で七夕俳句會

天の川三句持寄りの事

渡邊何鳴氏等を中心とする俳誌『蒼蔭』の同人は、吟行に句會に近來の活躍目ざましいものあるが、來る七夕祭を搦め手から禮讃する爲來る二十三日（七夕當日）午後一時から平町聚樂園に於て句會を催すと云ふが會費二十五錢『天の川』三句持ち寄られ度いと

大蛇の刺青した阿婆擦れ酌婦逃走

住み込んで僅か三日

湯本町向田四九料理業大和家事秋本シツ方抱酌婦千葉縣東葛飾郡松戸町生れ渡邊トメ（二五）は去る十一日前借二百八十圓で住み込んだが僅か三日で十二日夜九時頃簡單着のまゝ『一寸酒呑み行つて來る』と云つて行方を晦ました

同人は兩肩に牡丹と櫻を臀部に物凄い大蛇の刺青をしたあばずれ女で背後にモグ 周旋人等の暗躍あるではないかと屆け出により平署で同人の行方を搜査中である

。。。。。德男起訴さる 石城から宮城縣南に至る濱通りを股にかけ二十件二百五十餘圓の現金專門泥を働いた双葉郡龍田村下繁岡生れ鈴木德男（三〇）は氏家檢事の取調を受けてゐたが今十四日起訴平區の公判に付された

。。。。。木戸部長赴任 縣保安課に轉じた平署巡査部長木戸幸三郎氏は十七日午前八時平發磐越線で赴任する

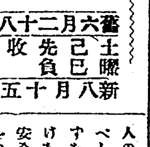
喇叭飲み少年送檢

再三の恩典も糠に釘 愈々公判に附さるる模樣

去る七日早朝平町新川端で盗取つたビールの喇叭飲みをやらかし平署員に逮捕された豊間村豊間箱崎佐太（一八）假名—は昨十三日平檢事局に送られ氏家檢事の取調べを受けてゐるが同人は手も付けられぬ不良少年で附近小學校停泊中の漁船、炭山の留守宅等から手當り次第盗みを働き之迄おかみの厄介になつたことも數知れず水戸その他他地方での犯行も數回、而もその都度年少の故を以て起訴猶豫の恩典に浴すをよいことにして今度も年に似合はぬ大膽な惡を働いたもので檢事も『愈々もつて性懲りない』と近日中起訴公判に付す模樣である

天氣豫報 小名濱測候所觀測

今晩も明日も北の風曇一時晴稍々涼しくなる



舊六月二十八日 土曜 己巳 先負 收 柳宿 新八月十五日

鑑判定應需 東京市本郷區湯島四丁目 高島易斷總本部 神誠館

▲一白 幸運は一家をうるほして萬事通遊す進むに吉し▲二黑 天馬の空をかけるが如し起業開店何れも吉し▲三碧 事業の損はぬ日失物盗難怪我水厄注意肝要▲四綠 人のせん動に誘はれて失策を招くべし▲五黃 七轉び八起きとうまずたゆまず終に成る▲六白 力負けをするの日靜かに家業を守るが安全▲七赤 ううちよすれば好機をのがすべし勇躍するが吉▲八白 千百の思案も役に立たぬ日口舌爭論亦注意▲九紫 にえ湯をのまさるゝ憂あり口舌訴しよう金談凶

十五日（小名濱測候所發表）
日出 四、五五 月出 前 二、四七
日沒 六、二七 月沒 後 五、〇四
滿潮 前 一、〇五 後 四、二〇
干潮 前 九、〇五 後 九、一五

暑中御見舞申上マス
大阪より皆樣の御壯健を御祈り申ます
本部 大阪
天光軒 滿月

御中元 仕着せ 用品の大賣出し
全店清新たる夏の商品豐富!!、絶好の特賣品!!
八月十七日ヨリ七日間
…獨特のおつとめ品…
結城 綿 金七十錢
越後上布 金七十八錢
ジョゼツト小紋 金一圓五十錢
本染 普曲散集 中形 金一圓五十錢
絹麻小紋 金三圓
夏セル 金二圓八十錢
最新柄パラマウント友仙 一丈モノ 金七十八錢
着尺モスリン 金二圓五十錢
東京中形 金九十五錢
銘仙 男女向 金二圓五十錢
盆踊用に文化手拭と粹な件天…新發賣
いま流行の日本一手拭と粹な踊り件天を陳列して御座います。是非御覽の上御用命下さい。
雜貨洋品大廉賣
あらゆる雜貨洋品、タオル箱入、敷布箱入など贈答品に適當な御値段の品が豐富に取揃へて御座います。
京吳服赤札附特賣
高級な西陣製品を思ひ切つた赤札是非御用命下さい。
御贈答にこれが一番御重寶な 商品券
三井吳服店 平町 電話 三八 二八四番

實家ハ靜岡産地ノ茶問屋
生産家カラ直接需用家へ
香味自慢生一本小笠銘茶
安價提供出來ル皆樣ノ店
買テ喜ビ賣テ喜ブ理想ノ店
卸小賣 大角園 平町揺槌小路